

## フランス語非再帰形反使役動詞の統語構造と意味

井口, 容子  
広島大学大学院総合科学研究科 : 教授

<https://doi.org/10.15017/1793611>

---

出版情報 : Stella. 35, pp.1-10, 2016-12-19. 九州大学フランス語フランス文学研究会  
バージョン :  
権利関係 :

# フランス語非再帰形反使役動詞の統語構造と意味

井 口 容 子

## 1. はじめに

「割る-割れる」「焼く-焼ける」にみられるような、他動詞の目的語が自動詞の主語に相当するような自他の対応を、「使役交替 causative-alternation」と呼ぶ。使役交替における他動詞は「(語彙的)使役 (causative) 動詞」、自動詞は「反使役 (anticausative) 動詞」と呼ばれる。

フランス語の反使役動詞には、再帰形／非再帰形の2つのタイプがあることが知られている。そして *briser* のように再帰形態のみを許容するもの、*fondre* のように非再帰形態のみを許容するもの、*casser* のように両方の形態を許容するものがある。

- (1) La fenêtre s'est brisée.
- (2) La neige a fondu.
- (3) a. Le verre s'est cassé.  
b. Le verre a cassé.

本稿で注目するのは、(2)や(3b)のような非再帰形反使役動詞である。このタイプは、2節において述べるように、「非対格性 unaccusativity」の面からさまざまな問題を含んでいる。そのひとつが完了の助動詞としての *avoir* の選択である。再帰形反使役動詞が、完了の助動詞として *être* をとるのに対して(上記(1)、(3a)および以下の(4))、非再帰形の反使役動詞は助動詞 *avoir* をとる((2)、(3b)および(5))。

- (4) Le tissu s'est déchiré.
- (5) La chemise a séché.

反使役動詞は一般に「非対格動詞」であると考えられる。一方、完了の助動詞としての *être* の選択は、非対格動詞の重要な特性のひとつである。自動詞用法の *fondre*「とける」や *sécher*「乾く」が、完了の助動詞として *avoir* を

選択する事実をいかに説明すべきか。

筆者もこの問題については以前から関心を抱いており、井口 (1995, 2002) と論文を発表してきた。本稿の分析も直感的な部分においてはこれを引き継ぐものであるが、理論的に新しい視点を取り入れて考察してみたい。使役交替や中間構文にかんしては、90年代ごろから生成文法のミニマリスト・プログラムにおいて「階層的 vP-VP 構造」に基づく分析が行われている<sup>1)</sup>。これに伴い語彙的アスペクトや総称性等の特性を、*«v»* (little v) や Kratzer (1996) のいう意味における *«Voice»* 等の「機能的な主要部 functional head」を導入することにより、統語的に説明する試みが活発に行われている。こういった動きは語彙意味論の分野にも刺激を与え、理論的に非常に興味深い状況を呈しているといえる<sup>2)</sup>。

Doron & Labelle (2011) はこのような潮流の中で書かれた論文である。あくまで統語論に軸足を置いているが、その分析は直感的なレベルにおいても興味深いものがある。本稿ではこの論文に特に注目し、その利点と問題点を明らかにしながら、フランス語の非再帰形反使役動詞について考察を深めていきたい。

## 2. 非対格的性格と非能格的性格を併せ持つ動詞

Doron & Labelle (2011) の分析の検討に入る前に、フランス語においてみられる反使役動詞の特性について、特に非再帰形態のものに注目しつつ、従来の研究を参照しながらここで概観しておきたい。

フランス語の反使役動詞をめぐるのは、「再帰 / 非再帰」の形態的対立が、意味的相違に対応するという主張がなされてきた (Rothenberg 1974, Zribi-Hertz 1987, 荒井 1988, Labelle 1992 等)。これをまとめると、以下の2点に集約される。

### (6) a. 外的原因 / 内的原因

再帰形反使役動詞が外的原因による事象を表すのに対し、非再帰形反使役動詞は内的原因による事象を表す。

### b. 完了 / 未完了

再帰形反使役動詞が、語彙的アスペクトにおいて完了的 (telic) であるのに対し、非再帰形反使役動詞は未完了的 (atelic) である。

フランス語の使役交替のさまざまな事例を検討すると、この2つの要因が反使役動詞の実現形態の決定に関与しているというのは、事実のレベルにおいて説得力のあることであるように思われる<sup>3)</sup>。筆者は井口 (1995, 2002) において、これをさらにおしすすめて、この2つの要因は動詞の「非対格性」に深くかわるものであるという見解を示した。事象を引き起こす原因が外的なものである、そして語彙的アスペクトとして完了的であるという、再帰形反使役動詞にみられる2つの特性は、動詞の非対格性を決定する上で、重要な要因とみなしうるものである。そして、非再帰形態をとる *fondre* 等の反使役動詞は、プロトタイプの非対格動詞に比すれば、「非対格性」が若干低いということができるといふこと、そしてこのことはこれらの動詞における完了の助動詞としての *avoir* の選択をも説明する、と主張した。

一方、Labelle (1992) は、*se briser* ‘こわれる、割れる’ のような再帰形反使役動詞が「非対格」であるのに対して、*fondre* ‘とける’ のような非再帰形反使役動詞は「非能格」であるという立場を鮮明に示し、両者に対して異なる統語構造を想定している。

だが、Labelle (1992) のように *fondre*, *sécher* 等を「非能格」と言い切ってしまうことには問題がある。Legendre (1989) が «Reduced Relative», «Participial Equi」と呼ぶ、いずれも過去分詞が関与する非対格性のテストに関して、これらの動詞は非対格的なふるまいをみせる。

#### (8) Reduced Relative

a. *la neige fondue* (Legendre 1989)

b. *le linge séché*

#### (9) Participial Equi

*Fondue*, *la cire* avait pris une couleur plus claire. (Legendre 1989)

さらにいわゆる *tough* 構文が関与するテスト (Legendre (1989) のいう Object Raising) においても (10) のような文を許容し、非対格性を示す<sup>4)</sup>。

(10) *La neige est facile à faire fondre au soleil.*

(Legendre 1989)

これらの構文におけるふるまいをみると、*fondre*, *sécher* 等を「非能格」と言い切ってしまう Labelle (1992) の立場には疑問を感じる。

### 3. Doron & Labelle (2011) の分析

Doron & Labelle (2011) は, Labelle (1992) とは異なり, 再帰形反使役動詞 / 非再帰形反使役動詞の両方を, 「非対格」とみなす立場をとる。その上で両者の意味的な相違を, 生成文法 (ミニマリスト・プログラム) における「階層的 vP-VP 構造 (layered vP-VP structure)」の考えに基づいて説明している。

Doron & Labelle (2011) は反使役動詞のうち, *se casser* のような再帰形態のものを Res-AC (result-focusing anticausative construction), *casser* のような非再帰形態のものを Proc-AC (Process-focusing anticausative construction) と呼ぶ (p. 138)。再帰形反使役動詞が出来事の結果状態を焦点化するのに対し, 非再帰形反使役動詞は出来事の過程そのものを焦点化することを示すこの呼称は, 本稿 2 節において指摘した, (6b) の「完了性」をめぐる特性を反映するものといえる。

そして Doron & Labelle は, 上記の「階層的 vP-VP 構造」に基づき, 統語的派生過程において «v» (little v) を導入するか否かが Res-AC と Proc-AC の相違を決定すると考える。そしてこれに加えて分散形態論 (Distributed Morphology)<sup>5)</sup> の理論を取り入れ, 語根 (root) が統語素性 (syntactic feature) と結びついて語 (word) が派生される, という立場をとっている (p. 140)。

より具体的には, 以下のような分析になる。Doron & Labelle は «v» (little v) と «Voice» の 2 つの機能的主要部 (functional head) を区別し, それぞれ異なる役割を持つものとする。v は「動的下位事象 dynamic subevent」を導入するものである。これに対して Voice は v の項, すなわち外項 (external argument) が実現されるか否かを決定する。Voice が active の場合, 派生過程において外項が併合 (merge) され得る。Voice が non-active (passive もしくは middle) の場合は, 外項は併合されない (p. 141)。

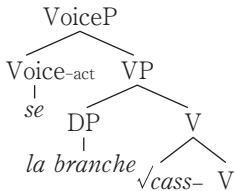
この active の場合は「外項が併合され得る」と Doron & Labelle がしている点が, 非再帰形反使役動詞の特異なふるまいを説明する上での鍵となる。「併合される場合」もあるが, 「されない場合」もあるのだ。v は「動的下位事象 dynamic subevent」もしくは「活動事象 activity subevent」の導入に加えて, 通常その指定部 (specifier) に動作主等, 外項の意味役割を付与する機能を持つ。だが Doron & Labelle (2011) は, ある種の動詞語根 (verbal root) においては, active の統語的派生過程で v が併合されながら外項をとらないこと

が許容されるものとする (p. 140)。非再帰形反使役動詞として用いられた場合の *casser* に代表される Proc-AC がまさにそれにあたる。つまり Proc-AC は「動的下位事象」を展開しながら、外項は持たない動詞なのである。

一方, *se casser* に代表される Res-AC の構造は, 機能的な主要部として Voice は有するが *v* は持たない。Res-AC における Voice は non-active (より厳密には middle) であり, «*se*» によって音韻上実現される (p. 140)。Res-AC においては, 「状態変化の下位事象 *change of state subevent*」は VP によって表現されるが, *v* を持たない構造であるため「動的下位事象」は導入されないのである。(11)-(12) はこの2つの反使役動詞の構造を示したものである。

(11) Res-AC

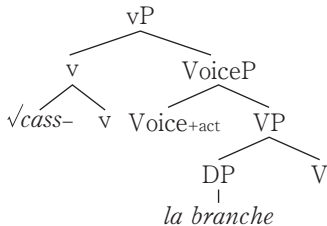
La branche se cassa.



(Doron & Labelle 2011 : 143)

(12) Proc-AC

La branche cassa.



(Doron & Labelle 2011 : 144)

(11) において語根である  $\sqrt{\text{cass-}}$  は *V* と併合している。このことは「結果状態」が焦点化されることを意味する。一方 (12) においては,  $\sqrt{\text{cass-}}$  は *v*

と併合している。このため、Proc-AC においては「出来事の過程（そのもの）」が焦点化されることになる。

このように、ある種の動詞語根において、v は外項を導入する役割を免れ、その機能が専ら「動的下位事象の導入」に限定されると考えることにより、Doron & Labelle (2011) は Proc-AC が非対格 (unaccusative) としてのステイタスを保ちながら、出来事の過程を焦点化するという、いわば「非能格的」意味を持つことの説明を可能にしている。

そしてこの「動的な過程 dynamic process」は、「動作主」を持たないのであるから、自発的 (automatically) に展開されることになる (p. 143)。つまり Proc-AC の項は、「動作主」ではないが、「内因的事象」を経験するもの、より具体的に言うと「内的原因による変化 internally-driven change」を受ける対象である (p. 144)。この点において、Doron & Labelle (2011) の分析は上記 (6b) のアスペクト的特性のみならず、(6a) に示されている「事象の内因性」をも捉えていることになる。

#### 4. Doron & Labelle (2011) の問題点

##### ——完了と未完了の用法を持つ非再帰形反使役動詞——

だが Doron & Labelle (2011) の分析は、以下のような問題点を含んでいる。第1節において示したように、フランス語の使役交替においては、反使役用法において *casser* / *se casser* のように再帰 / 非再帰の両方の形態を有する動詞がある一方で、*brûler*, *sécher* 等、非再帰形態のみを持つ動詞も存在する。

- (13) a. On a brûlé la forêt.  
 b. La forêt a brûlé.  
 c. \*La forêt s'est brûlée.

これらの動詞は、井口 (1995, 2002) において指摘したように、完了的用法と未完了的用法の両方を併せ持っている。

- (14) a. Toute la forêt *a brûlé* en deux jours.  
 b. La forêt *a brûlé* pendant deux jours.  
 (15) a. Tout le linge *a séché* en deux heures.  
 b. Des couvertures *séchaient* sur le sol, un cheval plongeait ses pattes dans l'eau, et sur le fleuve des navigateurs déplaçaient de

lourdes pirogues taillées dans des troncs d'arbres.

(Halévy, *L'enfant et l'étoile*, p. 36)

(14b), (15b) における brûler, sécher は、語彙的アスペクトの観点からいうと未完了的であり、「プロセス（過程）」が焦点化されるという Doron & Labelle (2011) の主張に合致している。しかしながら (14a), (15a) においては、en deux jours, en deux heures という前置詞句が示すように、これらの動詞は完了的であり、「結果状態」が焦点化されているといえる。Doron & Labelle (2011) のように、非再帰形態の反使役においては、語根が *v* (little *v*) と併合する、という関係を固定化してしまえば、(14a), (15a) のような用法を説明することができない。

### 5. *v* もしくは *V* との選択的併合の可能性

この問題を分散形態論の枠組みの中で解決する方策として、ひとつ考えられるのは、(12) の構造において「語根は *v* もしくは *V* と併合する」という選択肢を設けることである。Res-AC の場合は、(11) が示すように *v* を有さない構造なのだから、語根は *V* と併合するしかない。これに対して (12) が示す非再帰形反使役の構造は、*v* と *V* の両方を含むのだから、これは可能のほうである。

Doron & Labelle (2011) も、達成動詞 (accomplishment) である他動詞用法の *casser* (ex. *Pierre cassa la branche.*) においては、Embick (2009)<sup>6)</sup> に従い、語根は *v* と *V* のいずれとも併合可能であるとしている (p. 142)。後者の *V* と併合した場合には、結果状態が焦点化されることになり、外項は「原因 Cause」の役割を担うことになる。これに対して語根が *v* と併合した場合には、過程 (process) が焦点化されることになり、外項は「動作主 Agent」と解釈される (pp. 141-142)。

ただ、Proc-AC の場合には以下のような問題がある。Doron & Labelle (2011) は「各々の下位事象 (subevent) は語彙化されねばならない」という立場をとる (p. 144)。*V* を主要部とする「状態変化事象 change-of-state subevent」は、項 (argument) である *la branche* によって語彙化されている。これに対して Proc-AC において *v* によって導入される「動的下位事象 (dynamic subevent)」は、項によって語彙化されることはない。Proc-AC の場合に



は、他動詞 (accomplishment) の場合とは異なり、*v* の機能は「動的下位事象」を導入するのみであって外項を導入することはないからである。したがって「動的下位事象」は語根によって語彙化されねばならないことになり、語根と *v* の併合が義務的となる (p. 144)。

こうして「各々の下位事象は語彙化されねばならない」という Doron & Labelle (2011) の立場を保持する限りにおいて、語根が *V* と併合する可能性を残す上記の解決策は取り得ないことになる。

## 6. 結語

以上、フランス語の反使役動詞について、特に非再帰形態を持つものを中心に考察してきた。Doron & Labelle (2011) が、非再帰形反使役動詞はその構造において、外項はとらないが、専ら「動的下位事象」を導入することにその機能を限定された «*v*» を有する、とした点は興味深い。これにより未完了性と事象の内因性という、いわば「非能格的」な非再帰形反使役動詞の特性が説明される。しかしながら、sécher や brûler 等が、結果状態を焦点化した用法をも併せ持つことをいかに説明するのか、という点にかんしては問題が残る。

使役交替における他動詞は、「達成動詞 accomplishment」であり、「活動 activity」である使役事象と、状態変化を表す「結果事象」からなる複合事象である。「階層的 *vP-VP*」の考え方は、この2つの事象を、*vP* と *VP* にそれぞれ担当させたものとも考えることができる。語彙意味論、統語論双方の立場に注目しながら、今後もこの構文の考察をさらに深めていきたい。

## 註

- 1) ミニマリスト・プログラムの立場から、フランス語の使役交替および中間構文を分析した興味深い論文として、三藤 (1996) がある。この論文において三藤は、藤田耕司氏の提案する「3層分裂 *VP* 構造」に基づき、フランス語の使役交替における再帰 / 非再帰形反使役動詞の相違を説明している。
- 2) Rappaport Hovav & Levin (2012), 由本・小野 (編) (2015) 等参照。
- 3) Martin & Schäfer (2014) は、形態的相違と意味的相違の対応はない、とする立場をとる。この主張の詳細および問題点にかんしては、井口 (2015) を参照されたい。

- 4) (i) が示すように agir のような典型的な非能格動詞の場合には、この構文は許容されない。
- (i) \*Le président est difficile à faire agir. (Legendre 1989)
- 5) Marantz (1997) 等参照。
- 6) Embick (2009) については筆者は未見。本文中の引用は Doron & Labelle (2011) による。

参考文献：

- 荒井文雄 (1988) : 「中立的代名動詞の派生について」, 『フランス語学研究』 第 22 号, 日本フランス語学研究会 .
- Doron, E. & M. Labelle (2011) : «An Ergative Analysis of French Valency Alternation», Herschensohn, J. (ed.), *Romance Linguistics 2010*, Amsterdam : John Benjamins, 137-153.
- Embick, D. (2009) : «Roots and States», Unpublished Handout of lecture presented at the Root Bound workshop, University of Southern California, February 20-21, 2009.
- 井口容子 (1995) : 「フランス語の再帰 / 非再帰形自動詞と非対格性」, 『言語文化研究』 21 卷 (広島大学総合科学部紀要 V), 247-266.
- 井口容子 (2002) : 「助動詞として avoir を選択する非対格動詞」, 『ステラ』 21 (九州大学フランス語フランス文学研究会), 71-86.
- 井口容子 (2015) : 「フランス語の非再帰形自動詞と事象の内因性」, 『ステラ』 34 (九州大学フランス語フランス文学研究会), 29-37.
- Kratzer, A. (1996) : «Severing the External Argument from its Verb», Rooryck, J. & L. Zaring (eds), *Phrase Structure and the Lexicon*, Dordrecht : Kluwer, 109-137.
- Labelle, M. (1992) : «Change of State and Valency», *Journal of Linguistics* 28, 375-414.
- Legendre, G. (1989) : «Unaccusativity in French», *Lingua* 79.
- Marantz, A. (1997) : «No Escape from Syntax : Don't try Morphological Analysis in the Privacy of Your Own Lexicon», *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics*, 4.2, 201-225.
- Martin, F. & F. Schäfer (2014) : «Anticausatives compete but do not differ in meaning : a French case Study», *Congrès Mondial de Linguistique Française - CMLF 2014, SHS Web of Conferences*, 2485-2500 ([http://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2014/05/shsconf\\_cmlf14\\_01245.pdf](http://www.shs-conferences.org/articles/shsconf/pdf/2014/05/shsconf_cmlf14_01245.pdf)).
- 三藤博 (1996) : 「フランス語の中間構文と能格構文について」, 『仏文研究』 27, 1-22. (<http://dx.doi.org/10.14989/137855>)
- Rappaport Hovav, M. & B. Levin (2012) : «Lexicon Uniformity and the Causative

- Alternation», Everaert, M, M. Marelj & T. Siloni (eds), *The Theta System*, Oxford : Oxford University Press, 150-176.
- Rothemberg, M. (1974) : *Les verbes à la fois transitifs et intransitifs en français contemporain*, La Haye : Mouton.
- 由本陽子・小野尚之（編）(2015) : 『語彙意味論の新たな可能性を探って』, 開拓社.
- Zribi-Hertz, A. (1987) : «La réflexivité ergative en français moderne», *Le Français moderne* 55, 23-54.

例文出典 :

Halévy, D., *L'enfant et l'étoile*, 第三書房, 1985.